

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 24 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02333

研究課題名(和文) インクルーシブな社会を実現する学校の原理と構造に関する研究

研究課題名(英文) Research on the principles and structure of schools for an inclusive society

## 研究代表者

福田 敦志 (Fukuda, Atsushi)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10325136

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インクルーシブな社会を実現する学校教育の原理と構造の明確化を目的としたものである。この目的を達成すべく、インクルージョンを鍵概念として実践を展開するブレーメン州の教育制度改革を批判的に検討しつつ、当地のインクルーシブ教育を主導するRoland zu Bremen Oberschule実践を批判的に分析した。

その結果、多職種の専門家たちが一人ひとりの子どもの現状と課題を共同で分析しながら、「地域で働きながら共に生きる」経験を積み重ねる活動を、争いや葛藤の平和的解決の経験も含めて子どもたちに保障すべきこと、そのためにも、人的・物的支援を含めた制度的保障が不可欠であることを明らかにした。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究には、少なくとも2つの学術的・社会的意義がある。ひとつには、ブレーメン州の教育改革を方向づけている”Bericht der Expertengruppe zur Evaluation der Bremer Schulreform”(2018年3月)及び”Bremer Konsens zur Schulentwicklung 2018-2028”(2018年9月)について批判的に検討し、その成立の経緯や背景を明らかにしたことである。ふたつには、そうした政治的・政策的動向を踏まえつつ、当地での先駆的な学校教育実践についてインタビュー調査や参与観察に基づいて批判的な分析を行ったことである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the principles and structures of school education for an inclusive society. To achieve this purpose, I critically examined the educational system reform in the state of Bremen, where inclusion is a key concept. In addition, I critically analyzed the Roland zu Bremen Oberschule practice, which is leading inclusive education in the region. As a result, the study clarified that children should be guaranteed activities that enable them to accumulate experiences of "living together while working in the community," including experiences of peaceful resolution of disputes and conflicts, and that institutional guarantees, including human and material support, are indispensable for this purpose.

研究分野：教育方法学、生活指導論

キーワード：インクルージョン 学校教育 ドイツ・ブレーメン州 生活指導 教育課程編成

## 1. 研究開始当初の背景

日本においてインクルーシブ教育という言葉が謳われる際、障害のある子どもと定型発達の子どもの同じ時間に、同じ教室で共に学ぶための視点と方法について議論される傾向が強くある。この傾向は、インクルーシブ教育を少なくとも 2 つの限定的な意味で把握することによって由来している。すなわち、特別な教育的ニーズに関する理解を障害の問題に限定すること、教育実践の場を教室に限定すること、である。こうしたインクルーシブ教育に関する限定的な把握は、目の前の子どもたちに対して、貧困や虐待が背景にあったり、自らのルーツが日本になかったり、LGBTQ であったり等々の複合的なニーズのある存在として理解することを困難にさせるがゆえに、そうした子どもたちのニーズに応答するような教育実践の構想を蔑ろにしてしまう。ましてや、その子どもたちが日本の学校文化に適応することに困難を抱えていて、問題行動を頻発させるような場合には、容易に学校教育からの排除の対象となってしまう現状がある。こうした状況は、インクルーシブ教育の理念と相容れないことは明らかであり、この現状を克服することは喫緊の課題である。

この課題の背後には、人間の実存の問題がある。こうした実存の問題は、自らの存在に対する応答を求めたり、決定への参加を実感したりすることへの要求として現れる一方で、他者の同化を伴う包摂を当然視し、包摂されえない者を排除することを正当化するばかりか、時にはその存在を忘却しさえすることを求めるような状況をも生み出している。インクルーシブな社会を希求する昨今の動向は、こうした問題状況のなかで展開されていると考えられよう。すなわち、インクルージョンを問うことは人間の实存を問うことであり、それゆえにこそ、多様な人間が共に生きることがいかにして可能となるのかをこそ問う必要があるのである。

こうした問いを追求するに当たって、ドイツ・ブレーメン州の挑戦はきわめて貴重な知見を与えうると考えられる。なぜなら、同州には以下のような状況が存在するからである。すなわち、(1) ドイツ国内のなかでも、失業率や貧困率が比較的高い状況にある、(2) 昨今の「難民」問題に関わって、多くの難民を受け入れている、(3) 障害者権利条約の批准を受けて、2008 年より促進学校 (Förderschule; 日本の特別支援学校に相当) を原則として廃止し、通常の学校・学級に在籍させる方針をとっている、等々の状況が存在するのである。まさに州としてインクルーシブ教育はもちろん、インクルーシブな社会の実現を追求しなければならない外的状況があるのである。

こうしたブレーメン州の取り組みを理論的かつ実践的に主導している学校の一つに、Roland zu Bremen Oberschule (ローランド上級学校; 以下、RzBO と略す) がある。RzBO が設置されている地域の失業率や種々の社会保障の需給率はもちろん、移民の背景がある市民も高い割合を示している。また、RzBO に在籍する子どもたちの多くに移民の背景があり、学習や言語、行動になんらかの障害がある子どもも高い割合を示している。こうした状況のなかで RzBO の教職員たちは、子どもたちが卒業後もこの地域で共に生きていくことができることを最重要の教育課題として位置づけ、協働的に実践を展開しており、ドイツ国内においても注目を集め始めている。

インクルーシブ教育に関するこうした先駆的な実践を展開している RzBO の全体像について分析し、RzBO の実践の原理と構造を明らかにすることは、日本のインクルーシブ教育を発展させていく上で重要な寄与をなすと考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、インクルーシブな社会を実現する学校教育の原理と構造を明らかにすることを目的とした。とりわけ、インクルージョンを鍵概念として先駆的な実践を展開しているドイツ・ブレーメン州における研究および実践動向に着目しながら、(1) ブレーメン州におけるインクルーシブ教育の実現に向けた教育制度改革の到達点と課題、(2) ブレーメン州におけるインクルーシブ教育を理論的かつ実践的に主導している RzBO の教育課程の全体像、(3) RzBO における授業と生活指導の理論的かつ実践的な到達点と課題、を明らかにすることを主たる目的とした。

## 3. 研究の方法

上述の目的を達成するために、(1) ブレーメン州の教育制度改革の到達点と課題について、ブレーメン教育省のインクルーシブ教育課長であったアンドレア・ヘアマン (Andrea Hermann) 氏より提供を受けた資料並びに “Bericht der Expertengruppe zur Evaluation der Bremer Schulreform” (2018 年 3 月; 以下、Bericht 2018) 及び “Bremer Konsens zur Schulentwicklung 2018-2028” (2018 年 9 月; 以下、Bremer Konsens 2018-2028) を分析することを通して、そ

の歴史的・社会的背景と現行制度の特徴を明らかにした。

(2) RzBO の元校長であるエックハルト・ファイゲ (Eckhard Feige) 氏及び、前校長であるアイテン・サリイルディッツ (Ayten Sariyildiz) 氏より提供を受けた資料ならびにファイゲ氏の研究論文の分析を通して、RzBO の沿革およびその実践の理論的背景を明らかにした。ファイゲ氏は、RzBO の理論的・実践的なリーダーであっただけでなく、ドイツ国内における Gemeinsam Leben Lernen (「共に生きる」ことを学ぶ) 運動の主導者の一人であり、彼の理論的・実践的な蓄積を明らかにすることは、RzBO の実践をドイツの教育実践の展開のなかに位置づける上でも重要な意義をもつ作業であった。

(3) RzBO での参与観察ならびに教職員へのインタビュー調査を行うことを通じて、RzBO の教育課程の全体像を理論的かつ実践的に明らかにするとともに、授業づくりや生活指導における教職員の協働の在り様についての現状と課題を明らかにした。

#### 4. 研究成果

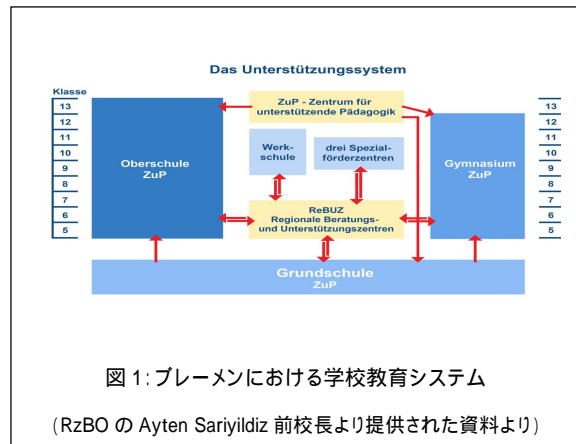
(1) ブレーメン州の教育制度改革の到達点と課題について、以下のような成果を得た。すなわち、種々の既存の学校を Oberschule へと統合し、Gymnasium との 2 本柱で中等教育を展開していく構想や、障害のある子どもたちはもちろん、特別な才能の持ち主の子どもや移民の子どもたちの特別なニーズに应答し専門的に援助していくにあたり、多様な子どもたちが「共に学ぶ」方向で追求していくことを謳った “Bremer Konsens zur Schulentwicklung” (2008 年 12 月) が公表された後、同州では学校法が改正 (2009 年) され、さらには “Entwicklungsplan Inklusion” (2010 年 12 月) も出され、インクルーシブな学校とはいかなるものであるのか、そこで展開されるインクルーシブ教育とはいかになされるべきであるのか、制度的かつ理論的、実践的に追求されることとなった。

ブレーメン州のこうした挑戦に対して、Bericht 2018 は概ね好意的な評価を与えているが、ここで評価された同州の学校教育システムは図 1 で示されるようなものである。各学校に 1 つ、もしくは複数の学校を統括する形で設置された ZuP (Zentren für unterstützende Pädagogik) のイニシアティブのもと、一人ひとりの子どもたちの種々のニーズに应答するよう、多職種協働の実践が模索されることとなる。この実践は、一人ひとりの子どもたちの能力を多様な専門家たち (後述) が共同して「診断」しつつ、一人ひとりの子どもに対する学習援助の計画を構想するといった、きめ細かい配慮のもとで行われることとなる。その際、「共に学ぶ」ことの実践が同時に追求される。こうした実践の具体的な展開を、同州の東西南北の 4 つの地域それぞれに拠点的に設置された ReBUZ (Regionale Beratungs- und Unterstützungszentren) が支えていくという制度的、実践的な学校教育の構造を同州は創りだしてきたのである。

具体的な実践条件に目を向けると、RzBO の前校長であるサリイルディッツ氏へのインタビュー調査によれば、1 学級の上限を 22 名とし、そのうち何らかの発達上の特性がある子どもは 5 名以内とすることをブレーメン州はスタンダードとして定めている。この 22 名の子どもたちが学び、生活する教室のなかに教育学や特別支援教育学を学んだ教師たちと共に、子どもたちの発達や言語に関するニーズに应答するための多様な専門家が存在している。教師を含めたこの専門家集団が授業や授業外での子どもたちの実際の姿を複数のまなざしで確認し、そこで得た気づきを共有しながら子どもたちの「診断」を共同して行い、その診断に基づいて子どもたちへの指導方針を共有していくという営みを積み重ねてきているのである。

他方で、サリイルディッツ氏によれば、上述したスタンダードはしばしば守られず、それゆえに余計に、一人ひとりの子どもたちの「診断」を多職種の専門家たちが共同で行うことは、学校の日常において過剰な要求になりつつあるという。Bericht 2018 もまた、インクルーシブな教育を実現する上で欠かせない存在である力量の高い専門家が不足していることや、専門家集団が協働する時間が学校の日常のなかでもそもそも不足していることもまた指摘している。これらのことは、インクルーシブ教育の具体的な展開のための人的ならびに物的な資源の十分な確保と適切な配分の問題の現れであると同時に、インクルーシブ教育の担い手として一人ひとりの専門家たちが実践のなかでいかに育ち合っていくことができるのかという問題が浮上しているとも指摘することができよう。

こうした課題に対して Bericht 2018 は人的ならびに物的資源の十分な確保を勧告すると同時に、ZuP や ReBUZ ならびに学校の責任者と研究機関の担当者、教育委員会の担当者としてワーキンググループを設置し、インクルーシブ教育の実現に困難を抱えている学校への支援の試みも勧告している。こうした Bericht 2018 の評価や勧告を踏まえ、ブレーメン州は Bremer



Konsens 2018-2028 を公表した。ここでは、先の 10 年のコンセンサスを踏襲して Oberschule と Gymnasium との二本柱で中等教育を進めていくことやインクルーシブ教育をさらに推し進めていくべく、105%まで人員配置を推し進めること、ZuP と ReBUZ を中心とした学校教育における支援システムをさらに充実させていくこと等が謳われている。こうした取り組みを進めていながら、2025 年に再び評価を行なうこともまた併せて取り決められている。

(2) RzBO の理論的かつ実践的な到達点と課題について、以下のような成果を得た。すなわち、RzBO は子どもたち自身が安心と安全の空間を創り出す主体として育ち合っていくためのシステムを創造してきた。

具体的には、授業開始前の朝の時間に、貧困家庭の子どもたちのための無料の朝食が提供されていたり、教師や SSW と対話したり、上級生が下級生の世話をしたりといった営みが制度として展開されていることが、そのシステムの一つである。

加えて、国語(ドイツ語)と英語、数学、Gemeinsam Leben Lernen と Vertieftes Lernen の一部は、常に複数の専門家が教室に入って授業を展開しており、芸術や自然科学、第二外国語や家庭科については 20 名ほどの学級がさらに小さな集団に分かれて学ぶように計画されている。さらには、Vertieftes Lernen

図 2 : Stundenplan einer 6. Klasse

Stunde	Zeit	Montag	Dienstag	Mittwoch	Donnerstag	Freitag
1	8:00-8:45	Morgenbetreuung	Morgenbetreuung	Morgenbetreuung	Spanisch/ Französisch/ Hauswirtschaft	Morgenbetreuung
2	8:45-9:30	Deutsch	Naturwissenschaften	Mathematik	Gemeinsam leben lernen	Deutsch
Pause	9:30-10:00					
3	10:00-10:45	Sport	Englisch	Spanisch/ Französisch/ Hauswirtschaft	Vertieftes Lernen	Naturwissenschaften
4	10:45-11:30	Sport	Englisch	Spanisch/ Französisch/ Hauswirtschaft	Englisch	Englisch
Pause	11:30-12:00 Uhr					
5	12:00-12:45	Kunst/ Naturwissenschaften	Gesellschaft und Politik	Deutsch	Mathematik	Gesellschaft und Politik
6	12:45-13:30	Kunst/ Naturwissenschaften	Vertieftes Lernen	Deutsch	Mathematik	Mittagspause
7	13:30-14:15					Ganztagskurs
Mittagspause	13:30-14:15					
8	14:15-15:00	Vertieftes Lernen	Mathematik	Ganztagskurs	Vertieftes Lernen	

(RzBO の Ayten Sariyildiz 前校長より提供された資料より)

において子どもたちは、何がどこまでわかったりできたりしているのかを確かめながら、さらにより深くわかったりできたりするための活動に取り組んでいくことに、教師たちのちからを借りながら挑戦していくのである。この時間が第 6 学年で週に 4 コマ配置されていることから、RzBO の教師たちが何を大切にしようとしているのかを推察することができよう。ここで大切にされているものとは、すなわち、学ぶことそのものの喜びを子どもたちに保障しようとすることであり、同時にその活動を選びとる子どもたちの自己決定権の行使の経験を保障しようとしているのである。

こうした実践を展開していくために、教師を含めた多職種の専門家たちは毎週ミーティングを行い、教材や教具は子どもたちにとってふさわしいものであったか、教師たちが意図した内容が子どもたちにどのように伝わっているのかを総括しながら、次の一週間にむけた準備が整っているかどうかを確かめ合うことを大切にしているともいう。こうした思想と方法に基づいて取り組んでいる授業であるからこそ、その評価は数字で示されるようなものではなく、当該の子どもは何かできるようになったのか、何を理解しえたのかを中心に記述されているという。こうした授業づくりを共同の営みとして展開することに加え、そうした授業に見合った形での評価の在り様もまた、システムとして構築されているのである。

RzBO 実践の特徴的な点はさらに、「共に生きる」に値する社会を創り出す市民として子どもたち一人ひとりを育てていくためのカリキュラムが構築されていることである。そのカリキュラムの典型として、Gemeinsam Leben Lernen と呼ばれる総合学習の実践と Schülerfirmen と呼ばれる、「仕事」に参加しながら学ぶ機会を保障する実践とが連関するように構築されている。加えて特徴的なことは、子どもたちのあいだで生じた種々の争いや葛藤を、SSW を中心として学校のなかで平和的に解決しようとするを重要視していることにある。すなわち、争いや葛藤の解決の試みと Gemeinsam Leben Lernen 及び Schülerfirmen の取り組みとを関連づけた教育課程を構築することによって、「仲間と共に、この地域で働きながら生きる」とは如何なることであるのかを、子どもたちは学校生活のなかで学んでいくように構成されているのである。

RzBO における多職種協働のシステムは、子どもたちの特別なニーズに応答しながら、一人ひとりをこの地域で「共に生きる」市民として育てていくことをめざした教育課程を実現していく上で、必然的に生み出されたものである。このシステムに参加する専門家たちは「一般教授学と教科教授学を学んだ教師」「特別支援教育を学んだ教師」「言語の支援に関する専門家」「言葉や数の指導に関する専門家」「外国語としてのドイツ語を教える教師」「SSW」「支援員」によって構成される。この専門家集団による協働による実践の積み重ねが、子どもたちはもちろん、専門家集団たる大人たちに対しても、インクルージョンの思想を深化させると同時に、インクルージョンを具現化する学校システムと学校文化を発展させていきつつあるのである。

(3) 上述してきたことから、「共に生きる」に値する学校づくりの視点として、以下のことを浮かび上がらせることができた。すなわち、多職種の専門家たちが子どもたちの育ちに責任を

もつ共同を構築する、多職種の専門家たちによる具体的な協働に際しては、一人ひとりの子どもの現状と課題を分析し、その子どもにふさわしい教育活動の提供を構想すると共に、そこでの活動を子どもたちの共同の営みとして構想する、「仲間と地域で働きながら、共に生きる」ことの経験を積み重ねることができるような活動を、諍いや葛藤の平和的な解決の経験も含めて、子どもたちに保障していく、これらを具体的に実践していくためには、人的ならびに物的な支援を含めた、制度的な保障が不可欠である、といったことが挙げられよう。これらの視点は、日本において積み重ねられてきた総合学習や生活指導の実践的営為を再評価する視点としても位置づけることができるであろう。

(4) なお、本研究はコロナ禍のなかで行われたこともあり、研究期間の延長を認めていただいた。この期間において、ドイツ及びブレーメン州におけるインクルージョンと教育をめぐるICTの位置と意味について研究を進めることができた。とりわけ注目すべきは、ドイツにおいてはICTを民主主義の担い手たるための道具として位置づけようとしていることにある。この点は、インクルーシブな社会を創造していく過程やその社会を創造する担い手を育てていく過程を検討する上で、きわめて重要な問題を投げかけていよう。

上述してきた事柄を踏まえた日独のインクルージョンと教育に関する比較研究は、これからの教育課程編成や学校づくりに対して、大きな示唆を与えうると思われる。この比較研究を進めていく視点を本研究において明らかにすることができたと考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Atsushi FUKUDA	4. 巻 第19巻
2. 論文標題 Issues in Conceptualizing ICT Educational Practices for Inclusion - Focusing on the Challenge of Bremen, Germany -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『教育学研究論集』	6. 最初と最後の頁 88-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福田敦志	4. 巻 903
2. 論文標題 子どもと学校をつくる決意と希望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 46-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Atsushi FUKUDA	4. 巻 17
2. 論文標題 Perspectives and methods of creating a school worth living together - Based on the practice of Roland zu Bremen Oberschule -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪教育大学大学院学校教育専攻編『教育学研究論集』	6. 最初と最後の頁 49-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 湯浅恭正・新井英靖・福田敦志・吉田茂孝	4. 巻 13
2. 論文標題 インクルーシブ教育における多職種協働の課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中部大学現代教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 福田敦志
2. 発表標題 インクルーシブな社会を実現する学校づくりの論点ードイツ・プレーメン州の試みに着目してー
3. 学会等名 日本教育方法学会第56回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福田敦志
2. 発表標題 「生きるに値する」学校を子どもと共に創りだす
3. 学会等名 日本教育方法学会第55回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 J. Kim, N. Yoshida, S. Iwata, & H. Kwaguchi (ed.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 219
3. 書名 Lesson Study-Based Teacher Education - The Potential of the Japanese Approach in Global Settings	

1. 著者名 T. Yuasa & H. Arai (ed.)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Keisuisha	5. 総ページ数 151
3. 書名 Pedagogy of Cooperative and Inclusive Learning in Japan	

1. 著者名 新井英靖・湯浅恭正・吉田茂孝・福田敦志他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 223
3. 書名 よくわかるインクルーシブ教育	

1. 著者名 楠凡之・二宮衆一・福田敦志他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本機関誌出版センター	5. 総ページ数 303
3. 書名 テキスト「学童保育士・基礎」カリキュラムー指導員の専門性を高めるために	

1. 著者名 子安潤編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 182
3. 書名 教科と総合の教育方法・技術	

1. 著者名 湯浅恭正・新井英靖・吉田茂孝編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 223
3. 書名 よくわかるインクルーシブ教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----



7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------